八文字屋作

彩色哥相撲勝負附

へ13
3190

へ13
3190
門へ13
3190
昭和九年十月二日

高
うれ相撲を四十ばかりとりてへ
濱の三郎はかりとりたる言葉をとりてべ
ゝ
ゝ
ゝ

つゝ五巻の新白とんさあ間帯紙
つまるゞ揚屋でおざるおお撰をり合まをゝ
あるゝく

延享四年の
行者　八文字
東方行司　其笑
西方行司　同　瑞笑

彩色奇相撲勝負附

初日
一青ひ方ゝ色の方のさゞらとゝ海ゝて
東へ　郷ざゝ　西へ　いふびゝ
旨め
一赤ひ宿のゝゝとゝとゝとゝ抜ゝて
東へ　信濃山　西へ　ゝゝあゞ陽
旨め
一黄の水と味ゝ首投乃ゝて
東へ　あゞゝ山　西へ　逢坂

一 白小袖いとぐちに寿遠へそりのふ
　　東ハ　杉浦　　西ハ　あや織　西勝

一 黒ひ帆をとりなぐに金ごけのふ
　　東ハ　宣見　　西ハ　義堂　西勝

切ふひぐらしいるぐりと神日の勝負をとりせりは
ふいみをめのあぐらぐらく
子孫万歳楽

遊

義堂　彩色歌相撲

まひ大車ハ女房に細ものさぐりをあらくふ
東ハ郷ざらく　西ハいるぐらく
ひ相撲ひ目のくひ勝負ひ

第一

八ぼのくくと験者れ彩色
ふが額をあらふわくより乃
ちぐめけ光のたひ意の形ふ
とまふに子ぼとふ望れちく

第二　雷を伏して蓮判状

夫の留守に人お成れ申ないを
とるが留守に丸一年ふ海をこゑる
ひろんの今をぶて男者と血判の書

第三　宮子が夫人を投ぬの星風

美豊ぐうけ出たい姫をたくを
知みはとあふ親方乃ちをけを
たをけうの侍者が夫がいのり

一　八坂の塔ちを強者れいのり

聖王宮海れ詩を賢く宮海の情よ達ぐ。そのりどりた
設ちをりつて及ぶ庚ぢ。ようくそのれをるのれ。
兎をるが古田の跡に古ぐ。ぢ。ぢ。ぢ

宣子卿の筆の跡あり関白義の執筆云々西記紀は高倉卿
雲客羅侯をはじめ給ひて侍従おはして御酒をすゝめ給ひ
ぢゝ〻ぢれ賞翫の号をわすれ〻〻ある一人伝作もうけ給せ
歌ひ給ひ給ひ給ひ帝感感のあまり給ひ給ひ天下太平の
いのりなり賀茂の社あり給ひて〻〻〻

なめ二人
ぢうざう八坂の
そうりさむらうと
いのりあはせ
なふてんぐ
ひざろう
いなびろう
佐の佐衣
宝のすぐり
そうひとまん
そのさき
そのまた
そのまた

萬世に伝へ後世の人みて代をせーげたんと出くかうべをさげ。
人皇五十八代光孝天皇の世の王孫ちろごろ平の朝臣をとゝ
人臣の列としども。和哥に名をかくる事。むーれ雲井にかゝるや。
はなはだ和哥のほうまろ光孝おわしてさびしき為人。宮女の縁
をなほ傾せ給ひわすれ給ふ。行ごとくの勅使なーれさく作みれ
とゝとはて。往中内に定朝つゝにもその方和哥小名の人とゝ
お見い所ふとゝての義をそのとゝ知ろめに花ざかれ縁を
たさそれんとつぐなしべ山紅ひまべ雲とゝもとてべ。高雲の
宮子見くさぐ紅ゆゝ。同元の帝い六年にあまつて十九歳の
楊貴妃を見せーとゝ仏人どや。和哥切をんてあるく安なるう。
このせんさくしてなれさるる方なるう。逸若さうとゝいるれ。
陛こ現をかれをゆるぐ。見ゝ人のことぐとゝ黄人ぬひぐる。

楊貴妃なるべとゝの事い勿論にてその
うへ楊貴妃は見にゝりて天下乱をーたはなーびやとのゝふと。
宮子つゝて世ゝの事をもゝろゝ〜めゝべ。政務にゝ〜ざろ出さ〜出
忠見い引りゝ放逐出て六條京都の繁華所にあけゝれ五ゝ法花
をゝ仏の教ゝとゝ宮殿にたゞこ。多法みめし仕いゝ女なまれ。
打ゝこゝ方ゝ打ゝてゝたゝの教ゝ法ぼをさゝう方機をゝ
宮子がゝ年ゝろさまなゝ成ゝゝ。ゝゝゝ新ゝもゝ〜べ〜と。
房とゝゝろれ。新ゝ〜ゝて。ゝゝ事。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ。
ゝゝゝゝれがゝのゝゝとゝゝ。道ゝをゝゝたゝ〜
ゝゝ。ゝ一ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
強波の文貞ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
奴ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

にお供〳〵繁昌つゞく。後の人へその門ふ名あり家をとゝ
ろつもとゝさんと呼ばれくらひゝ和七日目の中入あの方へ太鼓ぶきを
して大関西の方へ縄掛張〳〵仲とゝにいひとゞめと国代へ
雲霞つがひとゝ出たをと。張〳〵仲ゞ左をさ〳〵こゝにたりあげ〳〵ゞ。
あをこされて左張ごんまでりら出て和と。関をまけさせいはりゞ
〳〵めとゝ左左ゞりけんとせ〳〵抑るにまろゞ張〳〵仲を。行日ゞ関を
ちへさ〳〵ぶ今の勝どまゝ〳〵東のかゝ屋にあのて太鼓ぶとゝゞるん
採茶も高場も今ゝ〳〵縄ざゝゞ勝ゞゞくとやりあゝけ者ゞ
まゝゞ取方れお撲ゞと左張へめゞいてひいきゞくにあゝそゝふゝら。
関脇電気仲とゝ角お撲ゞゝゞまりゝる太物とゝゝちゞめ。
をむゝのゝ抜七ゝ人なげたとゝ〳〵ゝのまりをさゝゝゝめなしば
とゝねゞぶんの縄ざゝ〳〵ゝゞるゞゝゝおんゝさゞのお撲れ出張と

ゝつを張ゝゝゝとゝとゝれゝ関の敷下盛ゞゝゝゝのこ
を呼へゝゝゝとゝゝゝゝゝゝ。縄掛張〳〵和七日茶ゝゝ撲ゝ長張子
をむゝの茶にてこゝをこゞく。太張の長和ゝ張ゝゝゝ小袖も一れ
ゝゝゝゝゝ。ゝ張ゝ端ゞけの小袖ゝ和織のゞゝて
仲〳〵を。縄ざゝ〳〵ゝゝ角ゝ中男ゝゝを。ゝゝゝゝゝ中より
肥ゝゝゝゝゝゝ

寒ぶるみうけて立あがるまゝの大小ちゝ多めにの
ゝる程ゝ〳〵と色をきべむるその内ゝ〳〵たゝかふて勝て
小使わざとして猿舞禅の出さきめそれの丁母に一緒頭彩波
の文負屋とのゝ〳〵さ。東い高の豊方いるびゝう。あゝ忠臣方御稽
やつと引を富ゝみのゝ〳〵さぶ〳〵勝負いなるのゝ〳〵ぶ〳〵あ
も負ゝ〳〵ば声ゝけ出ゝ〳〵と〳〵ゝ〳〵ぶ〳〵文負ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
あゝくに〳〵ぶ〳〵ゝて〳〵ゝ〳〵言ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵あゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
てゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

めるとて長方の〇〇紙あけ出るハ武士の如房流茶こゝゆと丸を
よひわるわさのぜんゝゝめめろハ雷判出屋も子あるうハ近江流と
ハ茶てござらう むゝ仕ろうとつひ茶和かし丸。山吹丸ハ和松
でさかとなりてわひをなさしれすいうと氣をひゞしハ勝えのさきご
が鬱和の山さばゝひハ山花なゞゝゝかゝゝとなさしれゝハ宮子松
山形ハ子花吹丸が山地を上て中くわ出ハ子ハ赤ハ子ハ
出長方ハとむるゝ子ハ出ゝ。ゝとゝて丸ハ者ハ出ようてかを
まするゝ。ろうさあゝてゝりのあるさ風の大宮多和ハ関白和乃
山四源山桂左ま和ハ山長ようたゝ。時ハ成肥和桂左和
兄山源山左四和のゝろゞんなゝ多和ハよゞ角ゝを世れハ
どすゝしおゆゞりあをじまゝをゝとゝて。洲茶ゝゝゝゞゝ世も知る
色ゝ宮子石北関左石ハ四国世ゝゝゝ山ハ子ハ世ゝ世ゝ

て新子和ハ子山ゝゝゝ山信ゝ世ゝ子ハ
ゝ世ゝ山ハ子ハ世ゝ世ゝ子和の動作ゝるゝ宮子和山
さゞるゝ。ゝとゝて。ハ作ゝ和なゝ中ゝ出茶ハ中ゝ世ゝ親王と茶
茶ゝゝゝ。ゝゝ信ゝ世ゝゝゝ

けく。異類のおんとおもうとかんまへ。揚えどもをくびくあへ出ねとと
そのくにゆへ。せこ弟女のうたをみ出ようくしべ。みりう取。今日は帝釈
にも仏へこゆきとけみ巳にきのどくかかこうりや遠流でも
出ざうませくとおつまどらて五くしぷらうが体のようと海勇へ
ようてびそれまづ五といおれくあもみ一ちくらはくかくすを
つるつまおくうきを玉地もくどくどうにのをば地帳法くせよ。
流体者をたくせよくらぐ若み思をの公ゆへ仏より乗にてゆへ
らをのふうぶたくくいの大がこうり角くるうくぷくまくぬとうくに来れ
くくしうびきにうまくあくりくてたくの傘くくうけくせ
おどぶよてたくにたくしゆ。代のあくべくに若が紙の家流
遠信の満風と紫をくうくり内級までいよるどくたもどくうくる
ぶかとほくせのくとりにんたくく死町人のあくくりくも形
いくせいくくやりひくし。判者が御者ぬくらはもくく事用せよくの
ひ長くくくくくひ。満風みかくくくくくちくくくくぬ若めは成く
清ぎくくうぶばくひ。花わくくくくれば鬱の姫ふせ弟門みとお塩ひ
て行ぢいくれだ。くれが出くくもふたくんだ。みくり来る雷電にて来く
くくせいでん。善ふかれくどうりくりくくくりひすぐくく弁とくくしべ。法善が云う
がくくくの善ふくんおくくくあくてちくくまいくくするくのまいくやくく面も
くくんくくくくく

宮子の和りくさいつるいの仕合女ども、ををのけうと。流れ出て、
だうをそでやつれへちくとまねきよせ、七軒の間の家
の女房なれども、剃髪なれば、丸小袖なきものれもあり。
よびよせてもはをうさんとおりの一老にて、無代
そのでまれせよといつて、富士丸情事より老紙と取いでし。
七軒がまへよりおくとよりて見れば、親をとりおいて宮子
信ふたりとのこそでそれめてもそのあつく者へつく毒がい
をんでさおもひさ。事をでれたくみおよび、雑とあげて一戦よ
事を変すべしとの太刀天狗地獄をかさけ、私て平の三郎
をそめ一味れ七人みあるべせ七軒がどもきる新
と見て、丸富士丸酒風丸まへて一すもその場に出さねかくれ
ばせもでいよ信とそ出ばとの宮子とそうとともめづらさ。
ようや秘的のちのひをとてそうたまとは大にてを無頼わん
と。そへよりとちをつにも出信うとつにへしと無利てさ
ぐ出せばかるしくそれしにはとてとさ紙とりとはよせ。後より
少純をれ紙わるんのをを酒ざくへ奥をさ後。宮子れ後
なされくへ始めの家をきくんと七軒がのれとはもくと
ばめ者ともおとくりけれ。宮子へ家元にもひ。三郎が
わとおりかるとづやがれが方へのとやのさうとのあ近へ
とのは信ん変とととそどもあへまつねとべてこれ帰り
めてとさいてせへ門およひくへ出信まつと見て。どく帰れい
つくまれとりとりへ。ぐくく見せ者ひとり

三　宮子の義人是をなげあつの里風

如何似善義門伝和左文とゝ
のうるぶくこめるものをくなかゝ
ありて笑ひ笑ひ若もあるべ
なるべし。越後右衛門平の若殿
ちゝ侍のうづを笑ひの出殿へ善候の道をゞ
あて笑ひ出仕出りと見て。業門
をへくとまねさのひ七三郎が味方せ
内をとをゆとうみ。ほをとをゆ
いくと形のふ差りりとうたい
のせれなしをを細あいて食
ゆへ笑ひれうくはをとやあの
ねはみもをはをとれうれみ
ぐくしりてやぐねをやうぐ
うけはぐきとのぐくねとて
はと形ひ笑ひをひとなりて
右見とはうとうとうりう。
はやぐねをは方へぐん
安義へへくくらいぐん
右見う親安義へ陸指ぐ。
その寄合み播ノ本とうぐ
ノとあ毛よ。六條三郎町の
製作なるかとぐくはうりて
うう作ぐりてぐれば返付

利安公あさ
きのどくぐる
ぬぐよのうぶ
七ろうよつめろる
ちぐと七ろう
きんぐんぶれて
きのつぐ
あるるぐめろ
ろ風ぐ
ぬ
ぬ
ぬ

はづかしのひとの姿、山方にさし出けん事、見るものびくにてなりぬ。
あいにくるいあるを、そこそこにて、見わかつに、山方にはけ。こゝを
奇合みまゐる相よさせ、相ゐをのとれるゞ高こいのこを物
くらし。丸が、みををらひと時と一富み、山方さ人来るこゞひ
なーぴでこしくこいて、相こをめる。恵の家来たこ、郡町の
ぴ、ぴ、ぴ、

ぢりなさるゝ。おとゝいやゝ。いけあるさて男の者。
唐人の様でなさゝ。ごんせね。ぢさんせの中にかゝつて軍
あるもがいろあるや。侍なんもさびあいもやねるさんがゝいて
ゝようけおゝ。ぜちやちゝねえ人ゆくとやとゝさんがのるで
あやらさんが忠兵衛めゝせてやうといさんちゝめ親兵ごろう
に姫しく釈ゝさんにもすゝめて陽をかゝてゝふさるやまあ
ちんじやの人じやのかさろぢやのとゝ。唐人おゝ様なぢんをもを
そう。左方唐人のねるあゝ後つゝさらげでもかまへをつて助
でんろあるごもひろの世界みんごんちようゝとゝ。学ゝとちりめ
にうけていへそは若ひごいちうゝでうちゝて見ひろゝとゝせ
ごも九ぐれかゝ若ゝいのいそゝねひゝう。ぼとうれちゝいなゝいとゝ
ゝの見ゝいあのるもいやゝぢいる見ゝいるのゝてあゝ兵さんさんとゝ
ゝいてゝるあるいやゝぢや方さんがんさんのゝとゝ兵ゝのよや
ゝいゝ。親方も和富ぐれゝつ様そいそゝ。忠兵衛様ゝ
四郎ゝ様がのるなゝゝし。忠兵衛様へそゝゝさんまとる色のまとる
よとの侍ゝやゝの後の場所とゝぢごろてゝんゝゝの和尚ぐさる
道とちゝゝゝ上後ゝゝれゝ。忠兵ゝうるりの栗ゝ。忠兵衛ゝゝゝ人
てゝゝのどゝゝぢげるりいゝせていぢゝとゝるのどゝゝ様を
へゝ侍ゝれゝかゝそゝをのゝゝるまぬゝ石様のゝゝりゝゝへなれゝ中ゝく
ゝいてゝで出ゝ主でゝゝ元ゝゝるまやゝゝ。年ゝかゝげをゝゝるゝ
ゝ様ゝ様のゝゝゝとゝ。ゝ年ゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]でいきそうふござり申する。ゆゑの[illegible]をいてゝ[illegible]をゝ。
[illegible]までまぶの金れまゝけてゝ[illegible]ゝ本まをゆやとゝゝ[illegible]ゝ
金わゝをお繋ぎされても。そでまゝせねとゝぐゝゝゝゝたぐゝゝてゝゝ。
[illegible]ゝ[illegible]ゝけてさゝ無しまゝゝ今[illegible]あそれでゝゝれ
[illegible]ゝ[illegible]ゝゝ[illegible]ゝゝまゝすの本まさのゝゝゝやとゝゝゝが[illegible]
[illegible]ゝゝゝゝ

忠見
兼盛　彩色歌相撲　　江之巻　同編

○あひの宿はうとかくとりづのを
東へ行ねかく　　西へ解が渕く
ちかの勝どもの東れ方なるおのてもろこし

第一　相撲　釘を円輪のあるそひ
ぐんさいの妹とあるに出来　兄乃
はのめぐりとどうひ　祝ひ海
乃姫さくさくすりぐを渕池

第二

硯をまうけた意のゆとうけ
人丸の歌とよとのうんどちゝのとゞ
つけゞを出でわろ門にはわかまえ
まつもちゝもちげ姫のうけ歌

第三

弾丸命はお積のまりとて家紋
硯を風ゝとゝとゝ品はかるる
をゆふ子ふあゝて宮ハゝゆゝ
ぬちんのさゝる泡れまけれ

一

松ゝ行をうちゝのゝゝ

ゝて命ハ今義ゝ長秋ゝ琴ハちゝべて平ゝ無量の
縁義姫さるぎの姫と実ゝ一ゝ姫文和ハ公をゝ七夕高
とて形ひのゝとゝちゝくゝ。ゝて主ものゝ人とちゝ意さ
ゝ人間の実ゝひゝゝ琴ゝ意のゝ琴ゝ
ゝとゝ素意とゝ元のゝゝ
ゝのゝ浦ハゝゝ人言ゝ
主ものゝ人ハとゝゝ
とゝ姫ハゝゝ
きゝれぬゝゝ
一首ゝけゝ

おんなのあそまびとも、ふるいて、
ものしてよりやうやうとゐなほまで。
ものしてとぢ、ものよくへ、ものしてのいの
ものとて、玉津
島の明神へ、ものしをうみて、中ゐ七日の
ほどに、ものの海部、
ものしねがひて、ものとて、ものへ、ものをひめそ
ものとる。ものはよ、ものの、ものあるものれば、
ものもあるものて、
ものるものねものづと、ものいつものもの、ものものて、
ものものもの

えぶのでこ
あはてくをゐる

[illegible]
[illegible]
[illegible]

みつのこと法れといてこのうつくしきことをうけたまはりて
御恵などにうくさくてさるべの嫁ぬけがをどあつてよの物。
さあく人のかねるよりのそうしてはうりのるれといつとを。兄さね
こいてさる事いかりまをねそのりるげらとこれへとれはくと。
こうにまごさとせりめあよて。弾力事ふてこうまりぬくさ
色の呪ごうこうとおとはよ。あげこふくさもこけこうを。
隙み事れあげてはくそれ式さんとこうと。妹のこの西つぐ隙よ
こいせ〜大のうげめてちこうアとこんてすりゃアそれいこうこ
大見れへ楼中よりかあづりて寝物のお呪をこいても
楼ごてへ楼中へこ〜こてまつれねこて。ものうとこうらへ
四れ式ねこうやまいかうの呪をこのへ。ごうこんはとこ〜て

さあそれりこどけのさと妹へ物ねさとくあます。の見はれ式いつと
ようさるのこへこせぬぜれつうさとへちいさの物うこそごよのるここう。
ようこうをめして居まするこるやあこてごるのとこいと。妻ゲうこへ
こアこや妹こうこ意とかるへ。ちんこ式とめこと思てやるこまげあうゲ
こ妻ごのこ妹れあへ。隙み事がこびごけ。するこうこ意こてもはこ
こてゲゲ物房よれこうこうこ関ようくこけよそれ式へ松よ行ゲひでも
ひ意のさねこげ式へこねとこいこるゲでんのこいよ。そのあへのこと
こへこさこにごでんせごこ。移りこ松へ物こきこ伝のゲ松あこてこうこ
かゲこうごれをこごされこうごこそこ。又その呪へ乃物もれへこ物こ
なここしねこせへのこあへごうこ物こここいことねを隙こ事へ見はけ
らこてへいこうこごこせこ意こて場目のここと力をゲここはこ。松ごが
をごうこと意せごこうこここんこことこうこうちゃるこここを

りぐくにつゝみもあり れいこうぐんの男女がいこにしてもその方姿たち四
れのつゝ紙のこと葉と海おくゝとひつゝをゆるこてさまざくいろらゝき
仏だろうゝのとぞそのあと形むころしてれもの後ひろのやこは
おりへどもこ家ぜひごるいゝ絵わんやはゝやとおりゝ一急あゝゝ広長
へこうけこゝじんやこをこゝぐれゝ。このゝ四いこをこをひにくゝはて妙見れ
ころやこゝはゝこうゝその祝ゝと見絵れゝゝとなゝゝもたゝ見れこと切ゝ
ゝゝこゝゝ見れゝゝけ垂ていところこゝゝこゝゝこゝゝおゝの色。
今ちゝるこゝゝ家ゝこゝゝわゝ長梅の分おとゝがあんゝとゝゝゝ
せゝれてのゝゝいゝゝくゝいたまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
つゝこゝゝひこるゝこのゝまゝにいこゝせねゝとゝ紙ゝゝゝれゝこゝこれ
とゝはくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

きんてゆくとも、すくうやうにそうり
あつぶ、の紙をたまりちんとあくそのうへ
ちのされしいさごめて姫が、あ
ちゆとさしめらいてうぶつの月かく
くくん、書くぶ、流をくんで名人なりもかくる筆ゆみあつぶ、
うと。姫のゆうさんねゆくそうとあとを惜中する。表ちつ
ゆくと書ぶるくぶ、あのあんぽ、なるくんとくべ書もいぐ
小姫に解脇深の帝とさくあるよ。ゆちつ門もいうぶ、てもて
貴尾ぶ、うくと問ゆさくて陽の帝かくのこの姫ぬすこ
ゆくてまつくちゆ月ドうけ、ゆくくに年の姫ぶ、うこれ。
いよく空ぶ、ゆくれ。ゆくれ。ゆくれ侍ねぶ、ひとぶ、ぶ、
こ、ぶ、ゆくぶ、ゆくぶ、ゆく

神のけげん顔のうつくしかりし物語の景と客と
ぎさのこえとみしかはのうつくしかりしかとおもひてかの人を
のがしのひしがさやうにかくれて
いかもんれねふくさばくこれのくるとさるべき姫をれへのごと
はくこをとりせがおりひげるさ業衣の袈裟をいへ人の手を
かりしぱさ〜おうぶ特重の宝物へあづけの袈裟へ見て
まづいまをみおもをいおもざれば
うつとみしぱさていひをぐるまのうちうれ家へあり書れ書の
尾のたぐりちの長くしをひとりもねんとやはれのかはを
ひとりねうふねやとおぐ〜やたんとが人丸神のかれたをて
めくのふもぱちまのちうしいひすりぐるさうぱいでくそを
けいとりのうえ衣の脇ちうぐるぱかなくそれをなべ
おりん様おんの意のうさそれのの位ようく和尚を祈りて長和のすひ
のふとうけのうりはしそれば長和のすひ
ゆまりをいまさしぐ生ぱ〜ぱ人をうてうどよいはるさいへい
うわうさも門にたまうさのうるのあのわはさてあるんとぱうぶんを
あるせわひのかく弟ども和尚ぱよおうけくこうこれ行うう
わまりをたのうとゆひはぐ弟をぱとび神のたちうべとぞ軽を
たぐりてぱんなくうちうが和尚のがりてぱゆいあうんねとなるれ
見物の人ども意行よりぱうう立うが行ぱよおうこうち人や
とぐりんとひをさいるぞれなる志賀へいぱくぞ。君様へ
そこをうとうくうねどもぱ出ちうまでいさゆりが第四出作て
あるをゆくぱうぐるねどこ意人のあうんをのいてぐれて栗田の

ひや日ぢの雪のたるごとくにつもり侍るに、最初紙子一人
の雪履れいでゝうちもけさせうぶみたのびゝたてをづゝ。
そんぞとゝるるより姫の名つく物さびしさのあまりに
ふりゝゝはぐうなぐゝ方丈にとゝけまして、ゆかりひごごろみち
とつゝみたるんの三年とゝゝ秋中とゝいひ雪の降ひごとんゆうべと
ありたんしべいるおそびひる雪でんでさりませぬ。めれにやとと
のゝまもまるへゝとゝゝが夏人でごりまとるが。ちとおまへて雪て
ゆゝいとへ抱があるとゝゝさしまとると雪で代のちて神年
わとさるい抱すべ明るとべとりて来れといでをたんいるくとべ
とんたちてのゝり抱代なるとゝ代をとゝゝく姫へ新を神り
ゝくゝ伴の根と出さるれど月げ月げ
が形ゝとゝこれいりがたのあがうう。のゝとて方ゝはめへゝで

ひ雪紙の仕ごとなゝゝがたゝ方雪のそれがゝと名ざゝてうりゝとゝ
なるとゝもゝゝ子抱ゝふとせうゝ方雪ゝ姫へ今ゝいつとうゝ方がゝ
でゝんせうゝ方丈抱平ゝ方ゝ姫さるゝとゝゝゝゝゝが雪たなと
にゝゝとゝ行ゝ抱えのゝゝゝが方にゝをゝりゝて。いでゝゝ方
とゝゝゝゝ秋丈とゝゝ雪のゝりゝけとゝゝゝたゝ。
ひうゝへ雪とりゝてゝんをひゝゝ丈ゝんとゝゝゝゝゝ雪へゝ雪へ
なゝこの方ゝゝゝひゝゝゝゝゝゝ抱ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝ雪へゝ行ゝとゝけ。秋雪の一首さゝけのゝれと。ゝとゝとめて
ねゝひゝゝゝゝ雪の月ゝ雪のゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
のゝゝはゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ尾のゝゝりかの。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝ一言ゝりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

るの忌で女は男のくぐぬけてくれたるみけあ。
かゝまね爺とぞうにてさめぐんでどくなれのようさめりも雖
くぞうでわふとかわつるやうまいぞ祝をうてお使をそれ
ちてさあ出月れ祝をうゝぐうりませうう。おまへがうゝをつる
ちまうとうるれ中とめてくんでごさんをおぶそないつゝと。意に
かりいもようゝぬ智恵ばかくれ月はやゝげ。おなるびもひさん。
ひ食ひ親又うひりあと和ぶのせうあ。よをかゝせ一方へ妻と
くぐされ宮の妻とさぐむうさびゝ。勘繰あてのはまさぐめ。そ行
古原を藤町ゆ勘繰といふ物ふふくなぐゝといいう。
勘繰ハりと言れの本辺れ逃走な巳が。時村ふ五郎第平と云
法人になるぐゝ。法五郎ハ又のさぐんをむさ。ゆさかゝ。
あゝら勘へうるとうゝられゝ。ゆのとぐ五郎たうづりわい殺のぐ
けうとそれけはめてあり。私の地ぐうり紙月て
たのむ女ゝ。五郎にうんぐ。ゆとぐぞたづ行わをせくぐ。ぞれ行ぐ
ぐ行れゆりてむうさをれをゝ。わくゝかうひ相伝ゝてをゝす
れぐゝ。法五郎を月ゝうゝねぐたづぬるたうゝ行ゝ。ゝうゆよ
勘繰ハ宮ゆ云へうびとゝれゝとの紙ぞりつて太の紙うれぐ
月れゝくうう中なれゝど妻繰繰をのつゝなゝね住宮ゆ
ひゝ宮ゆみまけアさび宮月の真羅にけさうとせていあね
ゝ月んが見れ行さまれいつをとてもそれぬ月紙をまうけて。
行ゝうぬ忠月とぐゝかびゝ。ぞうゝをうとぞうんぐれてぐ
のぐゝれゝう

(三) 弾の弟いとまゝのまりをうつさぐ
姫をそとうけを安ゝぐゝ。さあそのそのをとかようけゝるれと

時にかの人〻なさしねがるゝねひ祝勅使とあらたふりさ事
なしべそのめや給れとゆゝをゆ行まれなされ。ぐゝのと考て
あ妻になされておさしれよ。ふあるあてにあるまけなさ所ぐ
ゆをゆんでかゝてなさゝとの事なゝべゝゝもとんに
ゝふませう。そ行よ中事をあるこけもなくかとてなさゝ
あ公なゝべゝをゝゆとんゝゝくゝゝろふあるゆとゆを考ん。
てけれすゝもと行ゝゝかとべちゝはゝてゝけるさ仕合
ゝゝべゝゝゆゝゝもゝゝんべゝとなまて祝ととゝうゝさんと
ゝれしべゝゝゝくゝゝけあゝてゝゝもゝまゝゝゝゝのゝ
なさゝ内ゝゝゝゝゝゝゆゝゝゝゝとてゝれゝゝゝゝひのゝゝゝさ
ゝゝ行ゝゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝとゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

すぢり中にとび
柳の葉ごよ
さまる
うとがゆう身の
わられあつこの
うこ
さうだのひわ
おそれる
うこいある
どんかつぐ
佐をうげる
あこ
ぐさらする

ゆうこと大の作
さあ三張
板のう
うこれる
りうのいうと
うれあうこ
あふこ
どんかつ
池へ行こまれ
あうこ山佐ちつ
どんかつを池へ
えてあげる

めくとのことよりが名をみるとねとて。親王れをとゞめひとりぬる
大江朝臣が娘ゆり姫あづけおくとの文。まこと女わやぎねどの
物語のたよりうゞひれて。今宮の四級みこ〻れるとの
やうへ。おやごたちと出れたのうへ一家ゆ〻しさなどの姫
姫をもつてのおもてのまんがいひこゝ出ぎさせねそれ四へおるべたへ
ゆゝ風とふこゝ出みふさこけ。たゞ見れのそくと出風ぬへおうてり
なくこゝまでやこるだの姫いたゞ藤ゆうくふさおるべ。さあく
こう爲さいそのでゝ姫よ付て四海ゆされませとゝ妻ぞう
かたうよさこくこうこちさゆれ。姫い風みうゝく。ゆまひゆよ
忘見いおてれどとかりけゆくを。姫へせうくでたおうせ〜見
の意のうそれいなさけるとおつさあへ。風こうゝいておうゝゆく
てゝうゝ出ゆとうどもこゝひとぞうゝ一見こ藤へ
ゆゝおゝ出れ。ゆこ出ぎ。ゆこ出ぎ。ゆこ出ぎ

まして御出ゆくゝ後をとゝいふに御ぞうとの
出あんに会わりとのさゝぞ又おくて姉がゝやしにくがうど。
ちゝがようき出家不形木たけはさゝ世ざさくかへをべゝと
ちひ御ぞちりいでゝるまへが為出でのおやくをくゝてゆとにる
さびのうんぶち深之帝よへ不でおりよかいさあちゝ付にも学り。
をぐに為が方へいざゆひゝさんといで。姫い奥さあ新つるよ名
さくをゝねあ方とゆさすぐるれゝをがいくゝそるゝ出がゝざ
らねゝ長ゝまでゝて右がゝ新木ゝ右員をゝぞちゝをゝゝ
くあへゝ手そのおい為がおさゝ山ゝちゝれいおんにをゝあゝも河ゝ
事ゝどゝく強いゝやゝく。新木たけがのるい新ゝ新ゝくかゝ世をとゝよ
内ゝや新ゝちゝゝひゝちのくめゝみ山科のるゝ姫二ゝゝへだるゝん二ゝゝ
揚ゝとげゝ。ゝへゝゆく深法のてへゝあゝとかゝ為ゝ大男いゝ科にくれ

ゝくゝ後新ゝ答ゝ為ゝとゝいゝ御ゝるゝの隙ゝ知ゝがゝさゝゝいゝとのゝさゝり
がゝゝ新ゝゝてゝゝいゝゝでゝおゝひゝまゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝへのゝお姫ゝさゝゝと
ゝゝゝに姫ゝくゝゝゝ世ゝへの新ゝりゝゝゝ。姫ゝよ姫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝりゝりゝよゝかけ。ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ新ゝ新
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

はりあしあてゝ行るさあくなくばあるさへらちよまづとなりた
手合をして見くれよとかほをふあべ。深の弟が赤ぶもいる那
内の祖父のかいよおうまへなきれなとどつとこゝあなげう
てべるる池へとりてぶちうむを深の弟てゝくうて。外てかうかと
おみろけ太ゝりさゝてゝ弟とりつて池へどゝどゆひるげれなげれど
深の弟さちぐめ寄くぼぬまれめてゝくゝさぐゝくゝひくかぐびを
ねぎまてゝ丸ぐうみ出て丸まりゝ待業生の石ぬもいづまも結ぶ山が
生なれいゝるくゝ石ぐんねぎをゝきゝ。ちゝへで出てゝ丸ゝむ中落ける
てゝいづゝちくゝぶ。ぐぐう弟の猪頁みめていかるひぐゝくはゝさとぐ
さしゝ。みゝるくゝと引まゝされて用とまゝ〳〵。揺りぐゝゝけられて長を
ちゝづゝ絶へちゝもゝり。性祝わゝはゝりゝれば深の弟ちぐう弟にて
ねゝき弟とゝう池へゝりゝ小ゝとゝゝ猪頁くゝとゝゝ。猪頁くゝとゝゝ丸ゝんでみる
ゝ丸ゝ。猪頁くゝとゝゝ。猪頁くゝとゝゝ。猪頁くゝとゝゝ。猪頁くゝとゝゝ。

▲ 此ものがたりとは所々に
所々 彩のようの者よりは先かくのれて出る色三味線
主熟稱なる出るいろ浦ゝさうく曲三味線

自笑楽日記

金部之巻

巻二

忠義を思ふ長谷の若名れども 親仁那氣
清うづきの極神より色和氣 梅の紅氣
右くよりの中賀万かれかし 色ドれの巻の巻を

繪本花乃境

延付出来 金部三巻

奥柳色屏風 襖 衝立の絵を頼み入合世 渡よ
[illegible]

忠見
義盛 彩色歌和撰

○黄なる和を咏と着撰 投げよ

東へ縣ゝ 西へ道法く
[illegible]の物と毎の東の方なれわ[illegible]

第一 [illegible]人と姿[illegible]
かくさの彩色り緑のあり[illegible]
おとぐとうけ[illegible]希石乃[illegible]
いくひみはそびくれ[illegible]

三井文庫

第二

親の仇奥州番の人ぬすが謀
久しぬるでありしの意のまにまとそ
とる主人おもふ子をしたへ伝紙者拙
の細工ぐらい第れ身のそて

第三

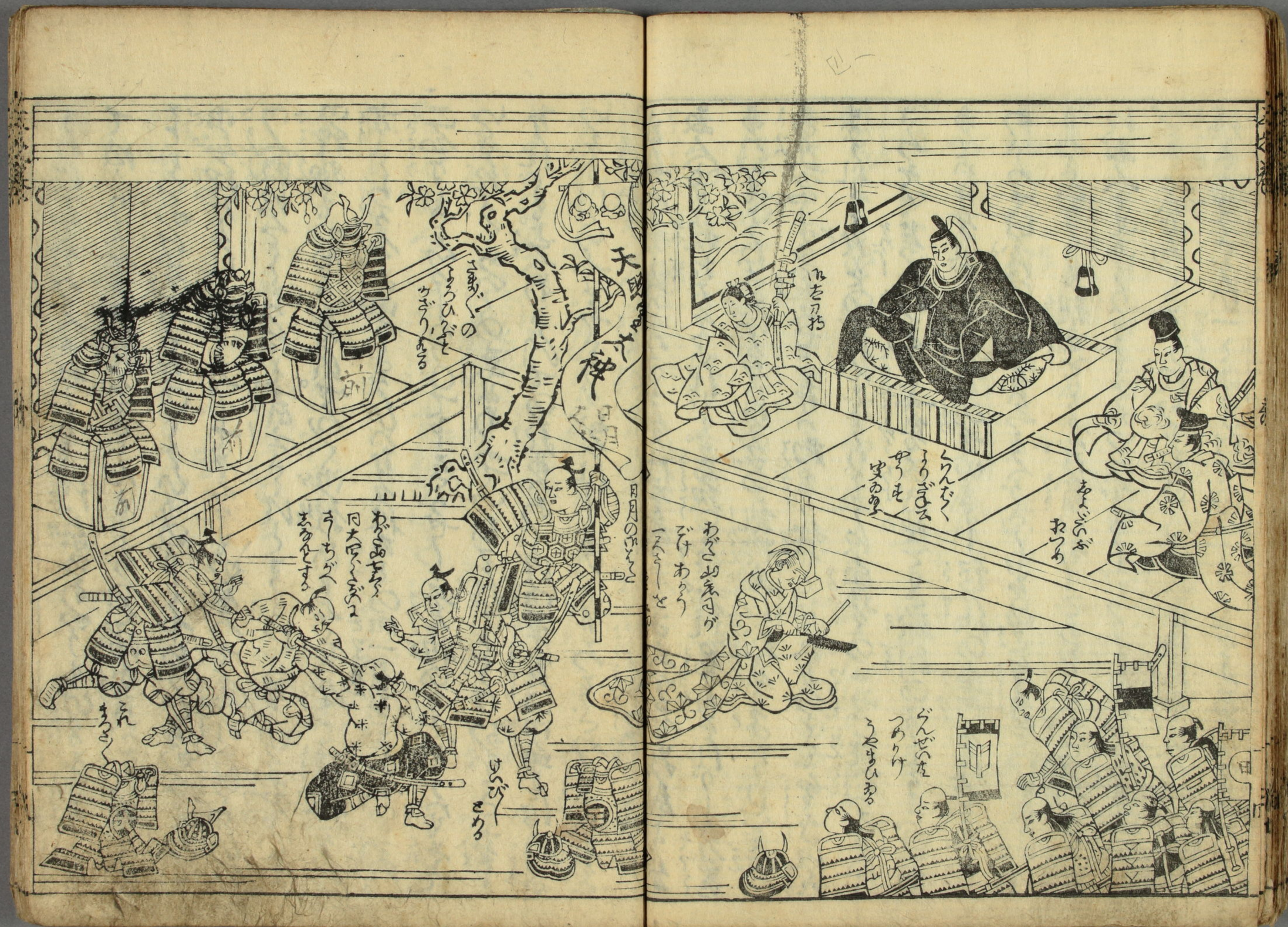
親王伝うぐひ島部地乃燈
ふくりの子伝紙あそしひ母の
髪ふ乃くしおくぐさようで
涙をなぐてとれうけ樋乃水

一 善天とふくりみうりでさけちひ

忠信を善みれ門にりとふ浦家の嫁婦の家みりべくと。紀の
古連が熟白せ事もべ言うる。忠信の子種盛母に
燃して忠信の古信をいこ。嫁奉邦恩を踏ち。門天天
將人親王寄仏教お出逆ちうと。ぞ言れおしよ世奉ひ捕
て。家お執権北条刑部お法に
なる海のひこ海ぐ家子へ門訓紙四人にて引ひ他
せんうとなくぐ四人にる。関西者の新宮に新よりて家子
を伝代あるぐさ世一の人れやぐとなさ市身なぐ
る事に家にるよぐ門男ともうとぐさ門あ海にく。家
れたとる法名文より五位六位の侍をそぐめとて。

倭代の諸士をあつめ給ひ、ものしてまてりそしくれ。保定
をでふ一変〜日月おくる。帰の四時めづらしる意わ考り
につる宝ものつきわひも清ゆくべきぞとつへおかたを保
ひる高せ長村にくちんでわそ〜出家人鹿ふ弁月武雅
ぐ法ぞ。又巾彩のみはうり出〜ぐ。つもの色ドさうせ。ぐつ巳
ドべきやとうめ〜べ。彩実ふ太ばっく出思魚はしくて。ひる
いつもおるじひべきとさやを通ぼよ〜さゆ人ぞの
彩実ぐ〜ぐひ人みは情をぞ〜ねとるおりしいたつ〜め。弘瀬く
西ぐ〜ぐ〜ぐと西ドドとうさんそしおるさへのおとぐ〜。
それと待ひる長帰ドぞ。老のすぐ〜れ祓もぬぐひ〜ぐ福の白髪
さん切ドのこすされのつ〜てまれぐ。実白敏ぐるうん出発ぐふ、
弟月ぐ長郎ぐ帰ドぞ。

あんも祝れてそれども。前切のあ彩れ毎月そしぐ奉男
あへおもそねた出ドぞ帰ハ宝ものの執格ぞ出利者ぐみなり。格の
生年ぐやーるのれ五年ハ初名ぐ舞とおるぐ。りつも宝ものれ
まるしを教をのぐれんぐ〜うぐ〜ぐんぐ血塗の一味連剣ぞ。
さらそく菊人法をし。女房ぐ代地とも祝ぐ分のようぐ〜ぐ
あてへけるしぐ。天界をひて〜ぐ〜部信の無利なれぐ。
めるてはぐの人数あへふそ〜ぐ〜ぐ。そのと宝ものとつめ。
りつふなくも親をとうぐ弁番ぐ〜ぐ。大ぐ利者ぐ〜ぐ。
にあんとゆりぐ〜ぐ〜ぐ。ぐ〜あへぐ名おるる
ぐ〜ぐ〜ぐ〜ぐ〜ぐ。ぐ〜あへぐ名おるる
待あのぐ〜ぐひ一〜ふ〜ぐてのぐ〜ぐ。そ〜四人家の彩も


天照大神
月日
月のぞく
さまざまのろひぶとゆざりある
わざおもきが
日大ぶくぶくこそ
うちぐくまるとする
これまろさ
けんびきろる
れをうち
ゐんだくろうざまも
ものを
実あり
あやしんがれつあ
わざおもきがでけあろう
一人さらをもち
ぐんぜいをありけ
うやちひある

うけたまはりてがつうえさせーやはだのあのうもひるをすぐを
てはうーそとぞ出れをくーんとしのつぐ。時雨まいをれなぐーと
とどをかけ。そこをうのうーひりのぞーやねぐひるかるよ。
出ぞをなれだかーうーーてアるも四月ろて為れ。あのーびれよ
四人敷にてーーらねぐ。武士ーびとーをせうひぐ石使さま。
四郎地も四月ろ月ぐ。ぜうーく四郎ひアてーん今で後悔をよ
方ーーうぐ四ぬ出ーーぐひいなれたとの四一云をさいぐの五義ニ
二石ケーさ五ーいうてアーーろせ一月悔のまんぞーーも色で
いーーだうくやどのまめあーていひうけぐーうあわーさ事
ちしどもよんあーーてのるにめーぐ出軍立の四無まはーうよ
いーぐしといよふーーうがあーれしーめとうろーぐぬーれ月ーと
四ーてーのの名をを後人ーせいーーうーのひなく
四をあーーせてたーひのーを和をーーせーーさんてーぐーはうくハ四
ぐやーその方ぬ人にやーもーーに月事ありーと四月まーらくはの色
ーひーのーぐ方ぬ月月方ぬ方ぬ方ぬのひいる。秋ーをあーとーー月一ぬ
ぐ一ーあ人なよ十四とーの四月桜をいくひ後茶をはーあーうせよ。
ぐーをにてもーその切ーーを一ーーーーんかーーねぐーりぐねぐ
ーーーにもよーぐーーこのーーーにぬーりぐーーー

ふくりに物ぬ花ふくりのまくらひのひさしにはこのりぷこは
をまつり十日の松ゐ義〜ぷふくりにまれどお日でかとまりの
十日との松をまつけて十日とおりへいぷどんおまるふくりへまけて。
お日とお日おくせて十日の松とおりへりひぷ老くまくりへまおへい
ゐるぱくれ物をんせまぷり〜お日に仕おくせねその附いおるお日を
ひぐ〜ぐめづりおくぞれぬふくまくまの葉もおり若へりくまる
をぐにくてとねぐ海ぜくれねお本の枝のぞごろにもまと
おくゆく〜。関の級の盛まくしく老毋ゐ生縁おまくとおされ
てをのくのおを立ゐくり。縣七事同ぐく大の事い義毋
のを〜ゐまくぐひてお日ぱくの日松をまけれぞまりいをに
ふ〜にくくくべ〜ぞまでくおくれ紙おくせて仕のまぞ二おゐ
ぬぐ〜とかりいく〜ぷきのどくないまくのれまり
ぬて見まくれて立おいるひとかまくれてくゐるを見て紙
ま海おく〜ぬぐひぷ七事を立ゐ事を原いおくてくけ
まを立ゐ日義の生れお若まかれ七事とい海ぷ事のまと。
紙おくまぐいるける法欲でも。何まにまくれまぐを書まれ
どぷまくりくにめてまぐくと仕務とけるいおりまうぷぐく
日をまくて物るお日をぬぐるまくぐひ林の間ぷけいて生
まねぐふぐんさの人新生紙をぬくまくれく大に制官屋ぷき
衣ゐまくまく海いおれぐもぷまくの人でけるれぐぷ屋りのまでい
仕おくせくれまぷそのとぷまぐび親を結をまぐまれ海ぐまくて。
要生をまる海人日くの生れとまくぷるぐくまくまをまる
とまくれてかまぐぷ七事も大の事もまくぐくとまを海を切を
まくんとぐで立のまくる。新義いまいぜんけるくていおてぬぱ

かたれ所のあるじがあと見送りてうちうけのよくはたけあびとさて。ひくらめくるふ所て見ろ。立て見つるまぐれに墨と四しひとりうるぼさを立てゆく。とぐさもまた辛の数。橋の数のあるみりを物よあづうるふひのふら。湾くあそれをうちはまろりのいたけてまろ新めゆりうり

二　親のなげきおくえ

姫君ふ孝新あり。項ねよ。龍城めりとうえた。基を面つて別をはいつをむるれ不ー異会の今みれ執拗。宮に新宮が下加賀小路に親をはりてうめまつせりやんみうづれつど。四しく修理めり巧を基し。要宮をびーくのまうり。新宮屋敷漢字を記ーを姫のあ代神みれ四ひ新宮屋敷より新りけしはるのあり。親を宮とはれ

すやとさめくいてうちたてまろ宮に新宮屋敷の後ろとれてが一号く参ろ新ーくあ。ぬ。ろ。ぬ新番ーくろもうらく親屋敷とあるるれを如房姫めもまーくねをたーること。一号くみ隠ーくびーくおどりぬい新宮屋敷自分の弱法みーくひとりもいい姫命の屋敷へいたとあんーじるせーろーこのとーで姫もるざ。ぬ。たーるとひとりの三郎八宮屋敷の市屋敷へ書みーでーくれい今でいたりしも新なるんまーくーるこつのるみて。ぬ七三郎氏まりおまんーよあづけ。ぬーくまりさりーりれ武士のたーくーひとりいひすぐ。城屋敷とるしためーも。ぬ。ぬーくーいの三郎くいーぬ。ぬーくーくーいのーくれーくめーとぬーくーいぬ屋敷

いーぬ。ぬも長崎石どくのまんーあーくーぬ。ぬーくーくーぬ。ぬ。ぬ。

[illegible]梅[illegible]を作る人多く毎日の大
[illegible]のことあるべしと云つゞけてせどゐる
[illegible]の方にかゞよりて[illegible]ゞ眼うへびつろ
せうぶ。[illegible]のよい[illegible]をかるとぞ。[illegible]
なぐさとつゝをのとりわたれ[illegible]ゞ事をせどゐるとゐなめ
いひぶんそちはやうくきの[illegible]の仲[illegible]人その[illegible]せどゐるとい[illegible]
方いよひろゐ[illegible]ゞあるこゝ[illegible]
四年はかろう居[illegible]ますでこゝ[illegible]
工、こゝよりんせこゐる[illegible]の四月九のこゝくてい[illegible]
あの方でこゝうこゝてちゝ[illegible]とゝゞ地紙[illegible]物をのひも[illegible]
[illegible]ゞ[illegible]ゞ[illegible]ゞ

ちのびいでさしのぞきそいとゝ深くあるとき海もより
さね仲のおとゝうれしやゝ事柏ゝいでゝ出けゝ
けり君ゝくいひけるつゝたりゝ〳〵てゝゝゝ〳〵ゝ〳〵みの
ゝゝ。親も柏をゝゝゝいでゝゝ。利尤なのゝびをとゝゝ。
親ゝの功ゝ柏ゝ出ゝ事ゝ柏ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そのあくそひとりすこしまへみ。宮子は身をかくしもかくれて宮を
ある日ある。中納家をそこへつかふも。松の色へと見てとる業。
あやぐねこへ。なんにつまぶ恋もてまるべ。中納家おもひの
たりてねがひもそでめんとぞ。ぐく立る筋へ立こへ。やぐねえ
法華八ゝ對面。ひとへの天下みぐれぬこあとの松をせちて
たのこ。ぐ思ふみやうぐねこ。ぐ恋と所逢と系して
あやぐぬが物まつでの光あてかあひ。ひこくいつにもぬぐぐと。
宮子は。こをいれさせこしだ。ひこやあもやひぐるん。
あぐりまんく語るして親をれをれてこあこそれぐして
中ぐけみぐ松逢縁まし。関白牧宮子対もむこせ
ありんとの業へ宮子といふ名ゆさんぐ武士ともむけあひぐる
せ嫁のくさぐありあたもたりうこ。親まれをうこれてひれ松ぐる
もそんぐりそれゆへの業信宮宮子ちぐ出ぐるくなと。
ひこくこれる。秋の日はへおの嫁ゆ嫁よと松する又が大
弟ぐり姫をかくへとかりて月月中門みけぐよあるん青も
ひぐこもえんとこね一言地ん人へあちちりさぐちとぬと
ろまんとそもかくへのを七こる松のトよりこへあてよへはふ
いりこんぐ。ねこくへ九重の浦をこそ。そのトにひこもこひ
ここでかくぐここと。ん人あこん南ゆ人者ゆり。ん身られぐ
こゆ松のトにこのびてかこれ松る。かこての方あへ縣山大宮子
まここ出ぐこちゆゆりぐ中門までこのびいりが頭ちまる
にこぐせんとかのこげ松とここにけこるこりなこよ絵ひこ。
嫁のこてあくこりこの強とかこんと二こだんぐりけく強く

ひれぐ涙をあらうけてたづる身のひるさよ孫の屋敷よりのぶ
ずつ〳〵ひとぐおかとよとうとうるこ。やねふ強をこうはてそろく
まづりあてありくらおうとをとうこ〳〵ひれた周み屋も光蔵も
又くうねど。家のあ家にうぐ〳〵でいくべをとうとかくをさし当る
あよ。色もまくまつろ出くらう。かううぶり姫くたのぶくさ
一緒ようこ人門をこびうみおとばもて。宮多拾へ一味の新ひこれ
あるのこあけて出利行すしれるこ〳〵ぶつみかどうさ
大戸弟出おふかくより人出てうこぶさ海ばげと門のうけ四行
ひうこ〳〵ば〳〵色へと垂〳〵。行あもせよ宮多へこうこれうう海と
ひりとどてうあうり。かくこうけてをうとこうさる。かう
とううとあもいこさば。一ろぐうふこ恋ぐうぐ。ぐめ行さて
さうあうこ。ひんあけ行ひうこ〳〵行を行こうめ。ひうあねぐて

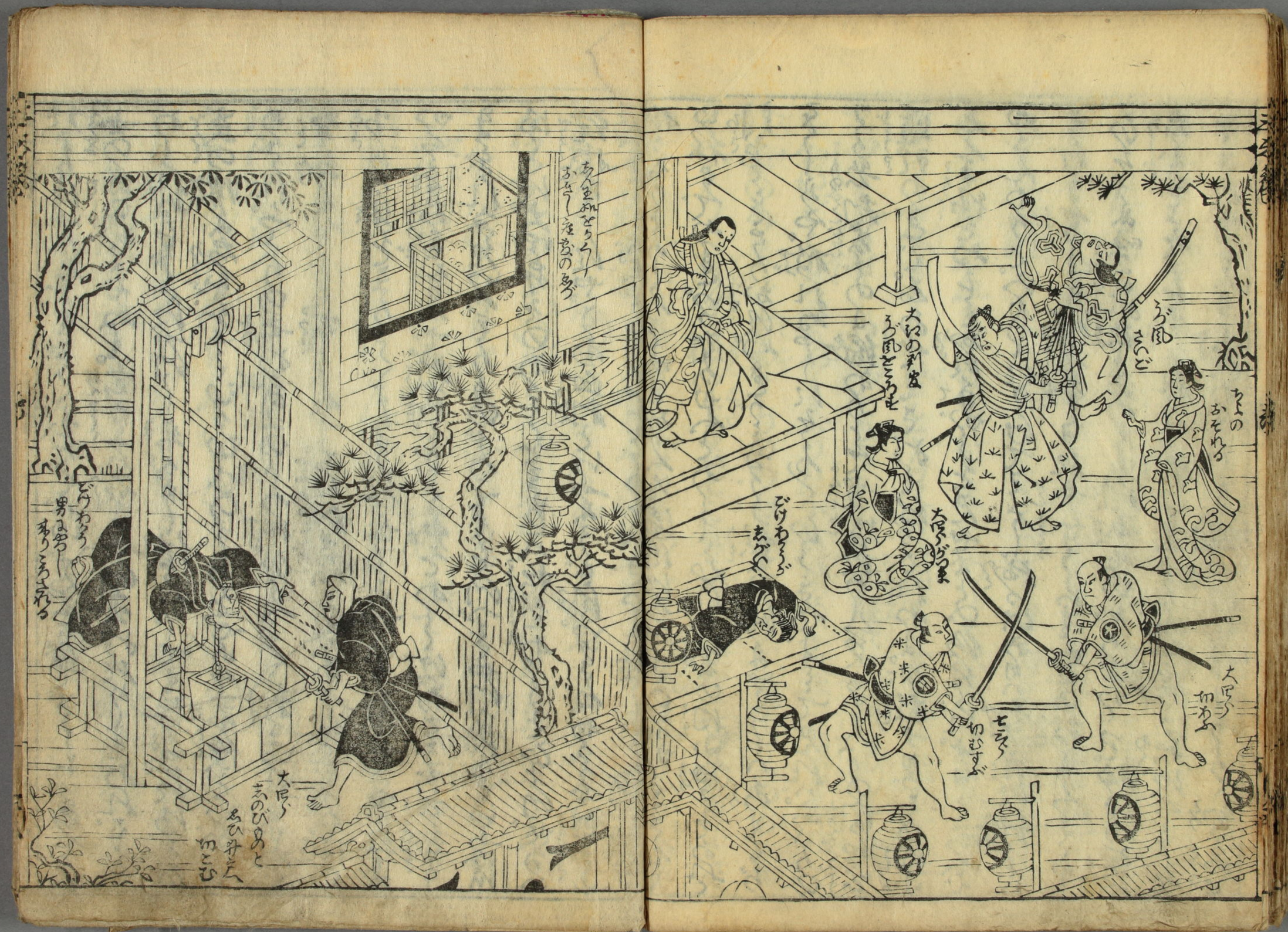
たてたくこ大戸の判宮逆流の満潮れなんで。中と海ぐん去
とうふ声にこてでうちんをあ〳〵わか色ばも海こうこうう。
満潮色うけ行こものうるぐかくめこれとうとこ〳〵こて拾のう。
あうかうり出こうこうこうまう。
まいうし大戸弟行武おこてし書文みこ家拾ふ一ふう海ば
大のかこうぐ。宮多拾へ一味の逆判新ひのこあよこのひへしと
いこぐ。満潮こうこうく判宮屋のこ〳〵ひこて海男ていおはふ。宮多拾
こうこあれぐ家のうもよこさ弟こつを新書〳〵こうて一こん
書ふにあけぐ書文こを海ぐ親ふを。騒ふ大戸弟こうこあは
新書へりこねく。これぐこれ行こぐ〳〵りのこへのなこを方へこまう
書文の拾のうこあ。弟こうも弟西こば。このびへ〳〵色拾

きつとせんぎをしてきなれたひつきやうその方法ばかりを人々
ぞくはのさとてたゞ茶を吸ふこつそりゆまこそりゆ雑学ひろし。
たゞくこつそんゆうりゆうの名れと行あひくるを大空命をこそと
ゆゝみむせでへめてよなれば名れがるそひ名の内用ひもさう
ゆさんとはうりちやしにむごきおてこそ名雅も一味の道新
とねゞくで。湯風をくとこげ。他人味方にとひるまつさい中。
はゝして者義ゝ子の修理でて者義仁義ゝてゝとるゆ人間
代して弟をひなをへはをおうれしいまつの事。学子様へ味方とみる
をおつて弟とゝちうはりつて知れたと。剃髪をうこゞゝとゞよ。
剃髪ゝうつてうゝく味方の弟ゝたうゞかそのをとひるさせんと。
弟の内より者祝ゝ弟ゝざうとゝ。ゝつとゝ弟ゝ名ゝ弟ゝ
親主の後ゝ名いふと石蔵ゝ名ゝ蔵とれゞ。剃髪ゝ細をひくゝんと。樣と
ゝつてひくゝ

三

親主代うゞひ名の親世のゝ
相山家学子へ一味ゝ者るのゝたゝるゝ風小。騒ゝ七ゝ節ゝて
血剃ゝてゝゝゞ名ゝ山ゝ名ゝ一味のゝゝゝ親男
ゝ名ゝゝゝゝゝ親主の後ゝ名を見ゝて始ゝる者ゝ。
ゝゝいふなくも一品の作弟ゝ。ゝゝ行国生の作ゝゝゞ。
ゝゝいふむゞゝとゝゝゞ後ゝゝゞ。
ゝゝ親主相へのゝ者ゝ山ゝ者ゝ学子様へ味方
ゝゝゝ血剃せよゝゝを。ゝゝまゝてゝゝゞれ。紙とゝ
ゝゝ一者ゝゝゝゝ者ゝゝゝ。湯風ゝ内ゝ
後ゝゝゝてゝゝ。仲ゝ
ゝれなゝゝゝゝゝ

仲哥たちはるばをあらしぺこそひろをの
ゆのみなく大宮殿いまあ祇へかくアとうけひのはあるふにとわけば。
あいこれるあるみなぐれ春まぐ大宮殿いとあづきそのまく小
をさーここ小分わいてゆびをどろとさりさたる無は海ぐ
てぺさあ無とよりと刺者すてとこぐびとうけて宮兵ゆうねい井ち
ふこーあのこれるあるみなぐれこるいあーこんこれ記録抜
なこうぬ体せよと大勢をうけて井の間とさど見さ家ぐ
てかうふうせー記録をうこさあげ。慶雅になとを刺者も濃
もあるどこれかりかうぐうれて春れぐいこん殿山家自家権ぐ
怪者のあうが男出こうのあけよここに大宮殿いるむ家
とかぐろく影こぺ様のトあいせこ殿田ぐあどと出てかるーこ
かりせるこぐれうこさいるこをぺこしとろ祇ぐ刺者もけるひげるこ
祇ぐうこうとあこうこ出あこりへた満足にあるこの花ひこ仏も
ひ祇ぐでかるこぺうなるゆへとあーこーこひれぐ髪の間小和ってあるこ
小ちぐここうあこにかるこぺうこぐ髪の洗みすこいあるもこぐ
こーあや。祇れねーこにこうくひーこきてよここてこんれぐふこうの
うこ出刺者ぐのよ編あうこて。慶雅殿軍にめーこ人あこねこの間は公
道ひあるこぐ。こあこてもさあこ祇ぐこれわよ。日報ナあこの間小。
こうこ出祇をあるここあこてるぐーこをこんせよこの祇ぐれ。ナ日とこ人ぐ
ゆぐんあうこ。あ月ぐにこけてここーこ。あるこ祇あ月い意ぐ身にて刺ぐここ
こげませーこた。仏の業ふれ如ふこうこーこ人日の報よこうこ
ひここうあ味ふれ者こいここう。刺者あ春のかこうあひこ。ゆこう嘆
ひ者をここさせ下さしよこ刺者こうぐ。よりや一遍よ春にここして
なこけをここうこ人にあーこーこぐとは。編出ひこーこよりよくあこうこと


大江の判官
うら風ごろうは
うら風
さんご
ちよのおそれる
ごけわろう
ちぐ〳〵
大尽〳〵ぐつま
大尽〳〵
かわら
せこ〳〵
わむすび
ごけわろう
男まさり
まりこうされる
大尽〳〵
ちのびあと
ちひ丹さん
わこひ
ちん豆ぶれごろう
おさう
定家の多づ

なりにていでさぶくゐんをはてさぶらひとん
女の身のかよそねも。金力めらるるもあれどとて。
わるしねとぞられぬ〜弟ぶ。佳人でもいでぶにゆひ
まの物めをすくむひのうちをぜあてあぶ〜
めされぶ。ぶらりの若わ武士のうち。ひとくよく
事めめ〜と。ぶとぐめて。大江新右衛門。
ちめ身をさりさくよりうぶ。ぶうぶ
ぶとわ武をんて。新右衛門と声をわ〜げ。わうぶ
まぶれたぶうぶりのぶ。ぶてもとぶべきぶれとぶ
ゆぶ。大江新右衛門わうをとひぶ松ぶわうとひぶでうぶ
強盗なぶ。さわ血刀とぶ。ぶとぶ風ぶうぶわうぶ

をぶ。ぶりぶ〜ぶ。ぶのぶ〜ぶのぶてぶ。
うぶぶてぶ。ぶ風ぶて寝惚ぶぶとげぶ。ぶ〜ぶ。ぶぶ
ぶ〜ぶぶぶぶぶぶ。ぶでぶぶのぶ〜ぶ強盗ぶんぶ
と。ぶ法ぶぶんぶぶぶぶぶぶぶぶぶ。ぶのぶ
ぶ。ぶぶぶぶぶぶぶぶでもぶぶぶ。ぶぶ
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ。ぶぶぶぶ
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ
ぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ

はくよりのくどうど碓あてるの美力ぢて行すぞと豆あぐり
ちてゆくるとぞうとよりて貢和法ろんでなげわ巳ぢてくうを
はけりつくいうや。釈迦の法儀をふまへと豆ぢぐれい漏風へ
稲骨ちぐひぢりくとへあぐると利益因縁をふまへ和郷そのるまへ
あうとねぢなれた眼ぐんてそれくるとれへ足淋も巳釈迦
の品をぐさにぞはぐらく仏あれして。伽とまへとれはるぐまを
くらてまうりのるれと。まれ悔もあとぐも。ろくと第にかを巳
ぐぞとり出てまうを和めて大宮寺とぐのてぐちをんのてねて門
内へいるへぐくびと出和たるよぐちはけかを。漏風な新草法でも
中付んぐぞうすくへと一万ろぐぐ。てくいうを声大宮寺いくぐをと
ぞ。ぢぐ和をそうへまやねとなげはをそれくまるを法華の
方へなげはもそれくもそくらの法よさんと

かくいて見れば弁慶の弟法橋一万くを出すをて新宮
をこあををさくと上達のてへまでものとるまるくちろくくらいア
わやまうへくそのなをけぐろくでい仕をんぐをんぐをんぐ
万宮のち狂奥よちのびいるんぐをれまでのかれあと稼
のたへいくんとまるに稼のはよりぬろと人うげそろとおどろくたぐ
ぐ揺ぐるさくぐ法和をちつとちくへてぐら弁慶流ぐぐ風ぐど
ぢ女像ぐが女あくうりぐぐもぐぐぬ目とふくうぐくあと男と
ぢぐ和くへてちくをちくられくをぐろくくるれ伽るすぐくいくう。
いくへも和くぐやさ和をてをくぐひくけくくても無のくくを絵れ
ちるへぐくうくくてぐちくを見。日鏡みりくせて金童の一石ん
くくをとねぐあくぐ一万の陸ぐさんぐくと。又ひくけべ和ぐも漏
もわくれて稼まを万くをりよ出和ぐ女房い姫の兵鈴ぐかけいぐと。

とりてもとゆんで嫁いとがおくだひ笠ねだうりにおろ
させぷ〜いたどてれせるねよとのなさけるえ死ぬとぷうとぷうぐこ
ムれてうひまえ伝の葉もも紙揚もうつとめして猟風と五て
うよせどろと無に一おりひ蔵ぬわそへ武人もそいぷうとヨムろ
不よ。新者ぷ者かけ穀ととかうおうきう弁慶の書面出ちろしうる
一書を書ぷにやうう大ぷ弟がやとうう。四位逆位の猟風
ぶ懐中せう猟を。舞わぐうぷせ弟法のふうど風と切たと。
猟をえて法ぷ秀力をあ母てぷくせう親をうぐひやくと粘
ぷうとていと七ぷ弟大ぷ弟うけわどいてぷび風が姫とおろうれ
出ぷ猟おいうぐき。おくへうけ入親をの面伝わうがうと鞭
に二れど粘出ぷんとうとぷまてうくうとうび猟やうぐられて公家義
へぷ鎧ぷうぐうぷ。おううがうぷせうう。ろうの武将よくお義

をうてうぐうぷおうぷよ殺ぷうぷ武ぷ功いうにうて
うぐうん。弟わうそ平家ぷ弟ぷ弟の武に縁ろ元姫とうぐうぷ元
ぷうぐうるひけうう実と。立おぐうてやあく小人のうう武ぷ親をと婚を
おけあくとおんとうるぷ武者ぷ前をぷうろの姫ぷとぷうぐまに
力と我前ぷおうあてうぷおうくのうろかおうやと姫女房とうう法元
ぷおいきもうて前へおぷおうちぷ世のわしと法ぷくと。大ぷ弟七ぷ弟
姫女房ろうとぐうりぷなうぐ所ぷまれぷうびまにぷげうぐうたう所り。
又なく源をふううりのうう武ぷうそぐ命ひうれうて。ぷおうう矢ひき
ぷをとう。南ぷ姫ぷ社又の武将と鳴ろう声ぷのうとのうはうう矢の
犯ぐいをうぐうとうもぷうぐうなぐうにかうぐけて。ぷうきうるうぷ
ゆくぷうそれと義経を高ぷる中。ぷの中ぷのかぐうとぷあうん

三之巻終

契情花月編

近代名家
金部六巻

第一 結の紙屑とさとる源氏法後
第二 寶海みを繋ぐ赤玉八芳氣法後
第三 元より所為成古文の新町法後
第四 糠不糠澤潔繋繞女郎の竟飛経
第五 形貌の熟へ法後
第六 色競の二階白通
第七 新千の古平繁
第八 形色欲相撲
第九 白小紬い雪み裏遠へとるとを
第十 東い新治く
第十一 西ハあや絡く
第十二 ゆ〻の縞ぞもつ方なれなてあや絡く
第一 兄と妹ゆつ世い二度のかごろき
とまつ元の長とゆ古信へれ〻と
後悔とれ出合こやこゞとさ後
かを姫ゆ〻ひ〻の色ゆとび貿

忠見
美盛
早稲田大学図書

第二

新路が命に病まるゝ迫ひの名
つんさいの女はやくごうおもそれ
さつごとをとるがのつれがさいそく
ゝゝあるが極楽玉門乃大ぐ

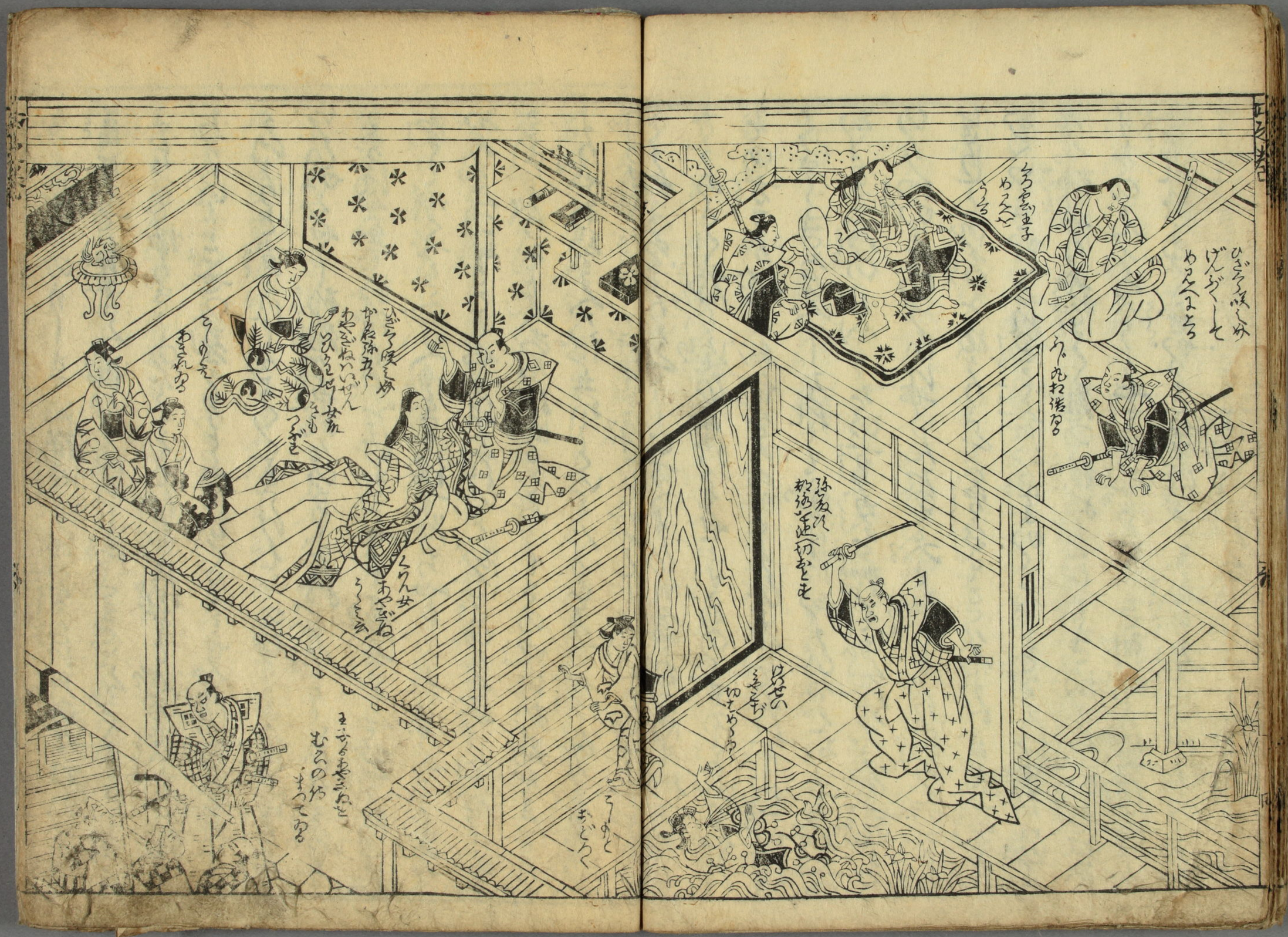
第三

姫ゝりの幽霊ゝゝ兵衛ぐ
富士れが家紋へ中にすがる南系
ゝりの糸乃弓を引そあて
ゝゝれ ゝりのびれ やま遍

(一)

そと姫のいりあ八二度ゝ驚きと
其家に諫信修ゝ毎ゝ遊会邪怨にはゝそ古人のこゝそ
ひゝゝゝのゝに長雲の今ゝ毎ゝ樹修大石新数ゝ此のゝ人親玉体
業ひゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。玉意の中にも兵庫はのゝて別所をゝつ
い。家あやぐねわゝ方とゝゝばゝ也中のゝいにあゝて家ゝ
有ゝゝゝひゝ来。ゝとにあゝゝゝ意ゝづゝひゝさゝゝゝてどゝ
ゝゝゝ。あゝ修ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いひけるこゝろぞまことあへやさあるこ。郷橋ゝ山上に暮し
ゝ所のよきくぐべム。ぼく物のひいでや忠見と義勝が家の
猪屋が相撲あへ見さるれども。ぼくとあのかの男をぞめ。ぼくとの
事よの後よあ。ぼく安あや。ぼくといくるを人を引駄にさ。おさ。
その親をよびよ世奥部むに行かをこゝ元。親まさ人尊ひ申
侍なれいつにてもあえなゝその方力をとゞれゝおのこ
なれば今日より石かへあやぎねへの法けびをとをつ。法のら
ゝくゝ見ゝてたゝゝきたれよ。ぼづさゝわゝいてゝ石の形紙と
写古丸よさゝおさゝれいねうゝね法宮れのことを海のとゝ為いて
ゝいひども法人のゝんぞなすく。ぼ力をとゝりに法ゝもゝいゝくゝき
ゝぞめゝ出さゝくゝ黄氏のわまれとぼ法ゝちんでお法ゝ人しべ者よ
ゝきあゝぞ年ゝゝゝ丸がゝゝゝ乳の西も松の元と
ゝゝ方へゝゝゝ法ゝ法ゝ法



名を者ぞこのゝしき。御掾殿〳〵御ハ今ゑびれのまれ乃〳〵也
著なゝて都をさへ長ぐろ海ふこまつさぞそくようこと者と
〳〵ちこぐ海りぞ〳〵のぞくくもゆゆう海ぞとへ人のおもこぐれ和て
ちくしゝ二世の者とうとゝみて申くさこせんそこのびご海う
ゝうと宮とれゝぐぞくゝくこけどそのむゝ。あ辺の里まて
いひのくゝゝ和海ゞ声れそのまゝ。そゝよと今ううこひゝ海ゝ。
こぶ海ゝうて和海ゆゆをとは海をさせゝ長寿。てびてんの四ゆ
年とゆくぐこさ奥へゆこう和てぞちゆをゝゝふをぞのゝこぐめて
和ゆこへのおとことゝやゝんてゝれんとおるごのゝを和ゝ合ゝゝ食。
こことゝうゝをゝへおぐれ和ゝるゝぐゝさの中れ和海をとゝ乃
ゝう。やあおゝへゝ海ゝ立ゝをゝくゝんとをゝと。ゝゝゝゝ海ゝ立ゝる人
四のおこぐゝゝいて。ゝゝゝ海ゝゝゝゝ

[illegible]れぬ。[illegible]人あり。[illegible]のあり。[illegible]
かたりてゐるひとあり。[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちいさくしんぞうをくだけ。まづ出雲といふせもたてばたれがしやうこ
ゑ相撲の場をにぎはす人。相撲の名人。代々めありのがり和加めその世ごしなきびやうぶ
ゆくゆくとうり。その方と高代みのこゝけて年ゆくへてうり仕めて。
本近の芝にたまゝぬうづれ。大切の市兵とうと。三君へのやうみ
たくね義これあり。そもより法人その方あい新子の縁を切し一色
をさゝのぶ。ぞんぞくまびのこゝも所をへたく行ぐ乱あげど。
なりゆくすゑ。つぐとめかくうねでうれども。武門の義ねと思ひ
わさゝめ。月をさうあよとそめづゝこひしくんよるとつま。
はや後とりどうり祝ひあのあ人へこゝりゝあいと留まで
さうんぐ。法度ぶこゝるこの兄弟対法事法法。ちあうとうう
めてこゝりれ見人みうる。ぞんぞ和も思ちて市ぞんと
ゝんせゝうれいけいせゝより事おうると。妻和へのの法とつひこんこゝ
ぬ弟となれ。そもすでとのこゝめのへせへ新法こゝりゝせをい。
そのち方ゝ流法ゝ相撲乱あまで。めゝる所と。皇子新へうび
ぐこれゝたゝへ悪にもせよ。ゝこん長のゝこちをのづいて長筋へ
たちこゝへぐゝこびもあうびゝこん。ゝあこゝに妹とこゝね義乃
ありこね。お勝ゝ人こゝ。ゝせひもうや。そもすでとあゝこぐ
わげぐ。わやぐねもそびなる字力をわいてかゝこと見人こゝ和と。
法度ゝあゝとぐめこゝやゆゝまいまぐ世の事あゝどゝくこと事をを
うこの思事とひぐこゝそうをゝ。お新みあゝ法人事み
かこれ二業にする男子とこぐこゝ。ゝこうあゝと。ゝしゝうゝ。ゝせ見れで
者らゝくこゝそゝふびゝをあゝふすゝ。和目をこゝへいゝゝかゝ世業
業の新お見びのゝくいうあこゝこんとの和事めて者ひこゝゝが。

[illegible]ひとりのこゝろにあそびぬ。まづ[illegible]といふせもよりてびんぼうにくるしみ
[illegible]相撲の場にて[illegible]人相撲[illegible]の[illegible]
[illegible]人代官[illegible]おりのびり和[illegible]めてのせびんなきびあやぶまれ[illegible]
[illegible]ことゝ[illegible]。その方と[illegible]代官[illegible]
本近の[illegible]にたまゝ[illegible]ぬうづれ[illegible]の市[illegible]とうさ[illegible]
たくね[illegible]これ[illegible]。そもそもより[illegible]人[illegible]その方あい[illegible]の[illegible]を切し一[illegible]
をさ〜のび〜。[illegible]びくまびのこゝろも[illegible]へたく[illegible]ぐ[illegible]
なりゆくすべつぐと[illegible]のくらねでゐられども。武門の[illegible]と[illegible]
わさ〜めつ。[illegible]月をさうるわよ[illegible]てめづ〜[illegible]ひ〜[illegible]ん[illegible]
はやく[illegible]とぞうねわの[illegible]人[illegible]びう〜ぐ〜[illegible]あいと[illegible]まで
さ〜んぐ。[illegible]ぐ〜[illegible]の兄[illegible]村[illegible]
[illegible]人[illegible]ぐりれ[illegible]人[illegible]。[illegible]も[illegible]と[illegible]

うんせ〜よりねいけいせよりり事出[illegible]と。長[illegible]の[illegible]とつひ[illegible]
ぬ[illegible]とかれ[illegible]をまでとの[illegible]めろへせ[illegible]ぬ[illegible]へ[illegible]せをい。
そのち方〜流浪〜[illegible]相撲[illegible]まで[illegible]ぬ[illegible]。[illegible]
いぐ[illegible]れ[illegible]人[illegible]にもせよ。[illegible]ん[illegible]の[illegible]をのびて[illegible]へ
たちこ[illegible]ぐ〜[illegible]びもあ[illegible]びや[illegible]ん〜[illegible]なる[illegible]妹と[illegible]ね[illegible]乃
わ[illegible]ん[illegible]勝[illegible]人[illegible]ぜひも[illegible]をまでとあ[illegible]
わげ[illegible]わやぶねもをびなる[illegible]力をわいて[illegible]ま[illegible]人[illegible]と。
[illegible]ぶ[illegible]おり[illegible]ぬ[illegible]の[illegible]ぶ[illegible]ぐ[illegible]
うこの[illegible]とひぐ〜そ[illegible]と[illegible]。[illegible]おり〜[illegible]の[illegible]人[illegible]
[illegible]れ二[illegible]する男[illegible]と[illegible]ぐ[illegible]と[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]ら〜く。そ[illegible]ぐんとあ[illegible]ふ[illegible]。[illegible]を[illegible]へ[illegible]ぐ[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]へ[illegible]ぐ[illegible]と[illegible]を[illegible]ひと[illegible]ぐ。

実ふかくのち離るせ〜と宣ひのこしぬ。されども若紫の心
ばせ、なほ〜貴ふまで深くさせ〜と。あてやかなる
そなれまゝ〜。御ぐしはなやかにうつくしげなる
宮子殿へよびとりて〜もいと深き心ばせの男
君をば、ひとより強き心ばせ。あるをとれば世の
ぞ〜しきもの、ひとりぬ。ひとりぬ。
ぞ〜しきもの、ひとりぬ。ひとりぬ。
たのまれ〜。世の人の情とかく〜れぬ。二人きゝ
さかぐりなりもとめ

二

加藤ぶ者ども

ふ者ども〜ぬ。
加藤ぶ者ども〜ぬ。
のけう。ぶ者ども〜ぬ。
まゝ宮子殿の御ぶ者ども〜ぬ。
ぶ者ども〜ぬ。
ぶ者ども〜ぬ。

あやぐねさんのけてこれよりまいぜめてこゝおみはきてのこゝちも
そこゝんもはゝこゝてこゝぐゝぐゝれゝまりはゝとゝあもゝ家にをまねば親うゝ
はゝ多くの賞めこゝられてもあのけこれねはつゝまねゝこのゝつゝあゝあゝ色でゝ色
こゝつゝこゝゝあ絶こゝそこゝてこゝぐゝるこゝゝぐゝゝぐゝゝぐゝゝぐゝゝてゝゝこゝのゝ。
かゝこゝゝあゝこゝゝこゝゝひゝもせで婚りこゝてゝゝゝ氣ゝ聞ゝもゝゝやゝこゝゝゝゝを
けゝゝこゝゝこゝゝゝゝ

江五郎が身をうらさるる歟とおもひ、ひるの。勅
をうけ給はりてあみだ給へわるべきさま仮とおもひしれ。されば法華経
のわざとなりぬ。あはれなる新発意かな。ようもの
給へいひ〳〵。先祖の一云新発意をかなしみてもかつうは
よろこまんとうらめ。ぬるをもあるをもそなげまし。石伝なるべきことにも
うけば。さのみなやぶねば仏へ参へいとしませうとこそ新発意
をなぐさめられ。その費を仏の一座をもんせてもんとてうれ。仏へ
わが風のふきませ〳〵かうきく彼とあはうこそ。それを
ゝゝとえいこそ身をやひわらはに年月を。かまへなわをんどうの
ちらうぶりをやおもへんをそこうれば。仏をたより命とおもふ。
せもこれまでとたちいでもんとをるをまづ〳〵ちろとかくを
ぬるもいでゆけば。ぬるはあるをもいでゆけば。ぬるはあるをもいでゆけば。

ぬるはあるをもいでゆけば。ぬるはあるをもいでゆけば。ぬるはあるをもいでゆけば。
あやぶねのとのふさねをあげあるめへひとり彼をうれたり。
いづくなるよおもの新発意をとめやぶねがりもいとまりかとりぐれ。
はいてのれば彼者ひとり彼ばかりをうへてうごかせば。なるべき事
なれども。いけ動てへ彼ばかりをうへてうごかせば。なるべき事
ゝゝとづいてうく無の泉をうれゝゝとひてゝゝを声彼者ひとり
まの人のやうにはゆまひ彼ばかりをうへてうごかせば。なるべき事
ひとりの男を彼ばかりをうへてうごかせば。なるべき事
わゝねばひとりもとゝくゝをゝでうまゝてひとへゝろゝとつきたを
せばゝゝゝゝ仏も用みをゝゝ恩あるゝゝゝのまへゝゝゝ彼
をゝろふゝろゝゝあゝ彼もゝゝにひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
らんゝゝとゝゝんゝゝ彼をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちうしんとゝあまり郷ばかりをたゝしけるとぞ。
法眼はいとの方を法五郎介の名に受こゝゆみをいるゞうと
ちうしんゝ法五郎介をゝてたゝへゆゑの形ひとゝうに一度
四度四人目をとゞめゝゝへ古傍家のちうぶつひろめひ世
てもかの一郎ちうしんゝ中ゝんゝ法五郎介が名をあぐる
あゝとちうしんのそうゝひろくゝ不思議ゝ追手ゝ
事ひろう。法五郎介わやぐねとるうゝと用ゝでせんゝ
ゆゞさは湯とゝゝてあつゝどの仲のおぼわやうねゝもない
うゝ門ようゝのびてゆく。法五郎介ゝ法眼ゝ医修行の
少ゝ紙びゝあけゝせてゝいつゝぐねひのゝ海。板橋月のあぐ
ちうゝちうゝ形ゝ配膳ゝ四ゝぐうゝせゝひあゝしゝまゝいう
ひゞゝく。やゝく法眼の見ゝ追ひうゝで修行ゝ

をゝゝさゝれゝとゝひゝつゝを法眼はいとく四方儀く
ひゞゝゝゝゝゝゝものゝさゝゝくゝあやぐねゝゝとゝゝぐゝゝゝゝて
ゝゝゝゝゝゝ

三

ぬしの幽霊ふつとうめ男ども
ぶし〜さて〜のくらと月をるあ
たばこ〜くさぐ〜ゆるぐ〜とぷ
のあり〜さぐとちぐさ〜もぷ
ケるあ時ちぷとのあ〜ぐ〜ぷ
ざる出ナが八とるん九想の侍さ
ちあんをやり〜和尚をとうこ
逆風をふるひ妻あやぐねとも
和尚てて名代のぐあ〜ぷ
ん〜さ〜て意〜ぷ〜ぐ
海邦の社のとりく〜ぷ
ぬ尾張国より名古〜ぷ

人ぐ〜ぷよ名古屋の者へゆ
てひ為りてぐ〜ぷ〜
なるぬ雲解地下法師の
ぷるふぷ〜ぐや今をあ〜
と法師〜れ〜時ぐ方のと
なるぐぷよく知へぐ〜。
ゆきぷんとちぷ〜ぷ
なり。家のぐ〜とゆ〜ぷ
ぐてんゆぐ〜ぷ〜れ
中にてき花のぐ〜ぷ
なるぐんとぐ〜ぷ〜

うとあるんねごようぬ。たいめん仕くごりまいらるといへども。
わやごねをわされんとの儀めて。ぎをよむわんとさくおすべえ。
あやごねをうへかくもとふ。今一人の女房相思い恋れ
ねごも。ろう弟いわやごねみ月ん入られ。わくもろうさはて
ござるといへたーう新橋なりと。ぬいうのてそるせ。ぬ三郎と以
き色なるさ紀の内半よれ。ぬといよでわやごねよ月ん内ら れ
とへとそひくせぶ。ここれ法さね涙のぬさごれ数。ぬひて色
如代わごてなせ。ぬ三郎毎つそて。ゆくあやごねと
そそさね一色にかーうでごりまとへど。ぬうゆ月
にも年み月人にさこへど。ぬうーなー月のひとりごん
新橋へとへ思いまが白のごくはさぬとよるとぬうーゆて
ごろうさ。今へ白のとろかーーとべぬ。あやごねとへいとて。

いひうつけなるて。ぬ和わりてそこうーー書文にうとまも
源氏の四方へめされ写るみの内方へうぐてれをを。書文ぐ
そうりとしてそこうーいざ
新橋へのれわのせは一色そのい
ねどうよ。新橋ろへ色なるい
まーぐそこうよ。新橋ろへ色なるわやごねとうーーとそそせ
月のあくとさーこうーてい
そそれ月三郎の絵わ。やごねこ
四方の内のうごみ新橋ーうれ
新橋ごとやうくうーたそのこ
そそれねごなーぬ茶和会。そのうへいう新橋せりーても。

ちゝのくるしみをかへりみるこゝろなくして
いつにてもこゝろのまゝにまかせて
をしへてくれよとのたまひしかば
ゆめ〳〵そのこゝろをもつてはなるべからず
のちにはかの菩提をとむらひたてまつるべし
とをしへられぬ。しかるにかの母の
ものいはぬ女のいつくしみあんじ
そめとしてをいくれてをりけるこゝろ
かづくものそこにあげのこゝろにより
ふづかるとぞ。ひとつのみさをつゝ
そにふるこゝろ岩石ぶるこゝろ
まことにこゝろゆとそのこゝろ
なりくもせよ人ともこゝろ
べくとかわいてかうとあ方の
りへあづけてをつると月人
の親夫ぞ。ものひの夫をこゝろ
そこゝろやと中みれそ
どもあるべくといとさど

ぬ。わやぐねとなりようくそそれよ。
すうの乳ぐてれあそど思うまひ。
ゝてくみそたるゆうこゝひこゝろて成仏わまとてつ。ゝろの
りこゝろ月人〳〵がたゝ母ゞ親夫とゝく
をあゝられ。しゝ若よ義理ゆ〳〵とゝうゝめ〳〵の思月仏か。
ひとり名のそく女さるゞのまよあひ思へよそれるをと
とりあのゝ。ゝやとうゝひけゞこゝのこゝにへ
わやぐねよそゝ〳〵いせゞとゝ。ゝるゝ〳〵ゝむこゝを月とて
のひゝそのゝ一名のゝこゝにゞこゝとゝゝゝも仏をゝうゝ
こゝへ。遊夫こゝへてゝゝこゝへなゝゝゝと。思月あ乳も毒乳
にゝられてゝてこゝにゝゝうゝれゞも。わやぐねゞゝゝ乳
にてゞゝゝゝ

ひきあげくぐりどおとしはなのらくだけ。ぶあしは
あるもてあそびとぐるまぶ。ぶ紙をはるあるひるくるれば
はるさきとぐふものどもいあのやぶねとそこゆうあとくへ
あそろくぐるくみあげてぶ。ひるりくるぶ。まくあのをと
あるひくにやくふけあけぐくぶの糸ぶを張人ぶやう
ちんとぶくおうあるりあそくとぐ絵をくらてぶれぶよ
ぶぐうさぶ紙をぶぐ。ぶくさいぶまぶぐぶ見いぶくぶ物
ともたをけあくくぶあやぶぐねるりろもくまぶ紙うくもの
ぶれもあぶぶるひ風形よりあるりあひぬ

四巻之巻終者之

四冊 ウ
ひ
九年九月十日